

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字

9

SEPTEMBER 2020 NO.964

NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS
<http://www.jrc.or.jp>

令和2年9月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第964号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可



わたしも赤十字

寄付の協力者

弘中哲雄 (ひろなか・てつお) さん【p.5でご紹介】

特集

コロナ禍で県外ボランティアの支援を受けられない…奮闘する赤十字の仲間たち！

豪雨被災地で頑張る 地元ボランティア

人間を救うのは、人間だ。



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

豪雨被災地で頑張る 地元ボランティア

熊本編

コロナ禍で県外ボランティアの支援を受けられない！ 厳しい状況下で奮闘する赤十字ボランティアの声をお届けします！



日赤災害ボランティアセンターに集まった仲間と一致団結！

高校生がたくさん支援に来てくれました

今、活動しないでどうする！と、皆で力を合わせます

飛行隊のメンバーも地上で頑張りました！

救護倉庫で救援物資の点検中

地域奉仕団が集めてくれたタオル、心を込めて袋詰め！

7月3日～8日に九州を襲った豪雨により、河川の氾濫が相次ぎ、その被害は九州全域に広がりました。しかし、被災した各地では新型コロナウイルス感染症の影響により他県ボランティアの支援を受け入れない方針に。甚大な被害が出た熊本県でも、災害復興は県内ボランティアの肩に委ねられました。日赤熊本県支部では発災直後から支部内に赤十字ボランティアのためのセンターを開設。赤十字ボランティアは支部で備蓄していた救援物資の積み込み(1)など精力的に活動を開始。配付する緊急セットに不備がないよう電池交換を行った

り(2)、支援物資の仕分けやパッキングをする(3)など支部内での作業の他、県内各地の地域赤十字奉仕団はタオル収集や被災地災害ボランティアセンターでの運営支援にも参加(4(5))、赤十字飛行隊熊本支隊も被害の大きい事業所からの要請に応じて地上支援に駆けつけ(6)、それぞれが自発的な活動を展開しました。県外だけでなく町外のボランティアも受け入れなかったあさぎり町で活動した球磨郡地域奉仕団の尾曲恵子委員長は「やっぱり赤十字奉仕団ですから、何かあったらお助けしたいって気持ちでいっぱいなんです」と語りました。

青年奉仕団



「びっくりモン」は地震・水害の初動対応を学ぶ熊本独自のカードゲーム。全国に広めたい！

熊本地震の反省から開発した「びっくりモン(日赤災害ボランティアセンター運営ゲーム)」次の災害に備えてさらにアップデートします

7月4日から、熊本県青年赤十字奉仕団(以下、青奉)は支部内で活動を開始。委員長の沼川晃範さんは「支部は職員も少ない中、被害の情報収集や関係機関との連絡など、迅速に対応しなければならないことがたくさんあり、サポートに入りました。私たちは青奉の先輩が作った『びっくりモン』で災害発生時の訓練をしていましたが、実際の災害は訓練と違う。青奉としての「備え」について、考える機会になりました」と述べました。学生中心の熊本の青奉は、夏休みを利用して被災家屋の清掃ボランティアにも参加しました。

沼川さんは高校時代に熊本地震を経験し、高校生から青少年赤十字に参加している

青奉で話し合い、ケガ予防のため炎天下でも長袖で活動



救急奉仕団



熱中症にかかるボランティアを救急法指導員の赤十字ボラが介助！

「この暑さで、膝の高さまでたまった泥の中で泥かきをする。被災家屋の清掃作業は過酷です。巡回中、3日に1人は熱中症の初期症状が出る方がいます」。救急奉仕団の堀徹男さんは連日休みなく活動する理由をこう語りました。堀さんは赤十字救急法を学んで25年、救急法指導員として講習普及に努めています。救急法を学んだきっかけは、20代のころ電車の中で倒れた人に何の処置もしてあげられなかったから。今の堀さんは救急法の知識とスキルがあり、熱中症なら早期発見することで倒れる前に助けることができると知っています。「被災地には寸断された道もあり、救急車が到着するのに50分以上かかるんです。ボランティアが活動する場所で重い熱中症になったら命に関わる。ボランティアの命を守るため、救急奉仕の活動に専念しています」

「毎日、ボランティアの活動場所を巡回し、熱中症予防や応急手当てに尽力しています」(堀さん・写真右)

地域奉仕団



「支援を長く続けるため、シフトを細かく組むなど工夫しています」(三栗野委員長・写真右端)

困っている人がいるのに、じっとしてられない！災害ボランティアセンターで県内ボランティアを支援！

八代市災害ボランティアセンターの運営支援を行う、八代市地域奉仕団。委員長の三栗野恵美子さんはこれまでの活動を次のように振り返りました。「赤十字奉仕団と言えば炊き出しでしょ？でも数百人ぶんの炊き出しをするのは食中毒の不安があるからと行政から止められたんです。被災された方のために何かしたい、と悶々としているときに、日赤熊本県支部から災害ボランティアセンターの運営スタッフが不足しているとの情報提供がありました。うれしくて、そのお話を飛びつきましたね」センターでは来所されたボランティアの受付補助と、作業場から戻ってきたボランティアのおもてなしをする地域奉仕団。受付では新型コロナ対策で検温と手の消毒が必須、作業中も密を避けるようにするため、活動の負荷や制限が多いそうです。三栗野さんは「災害で大変な思いをしている方々のために、奉仕団のみんなと工夫しながら最後まで活動を続けたいです」と語りました。

7月4日からの赤十字ボランティアの動き

(日赤熊本県支部のみ)

■活動ボランティア：(各「熊本県」省略) 地域赤十字奉仕団、青年赤十字奉仕団、無線赤十字奉仕団、救急赤十字奉仕団、賛助赤十字奉仕団、介護赤十字奉仕団、海上輸送赤十字奉仕団、接骨・整骨赤十字奉仕団、赤十字防災ボランティア(Lネット、リーダー会、大楠クラブ)、赤十字飛行隊熊本支隊 (GROUND チーム)

★用語解説：「DVC」=災害ボランティアセンター

活動人数 延べ521人 (8月17日現在)

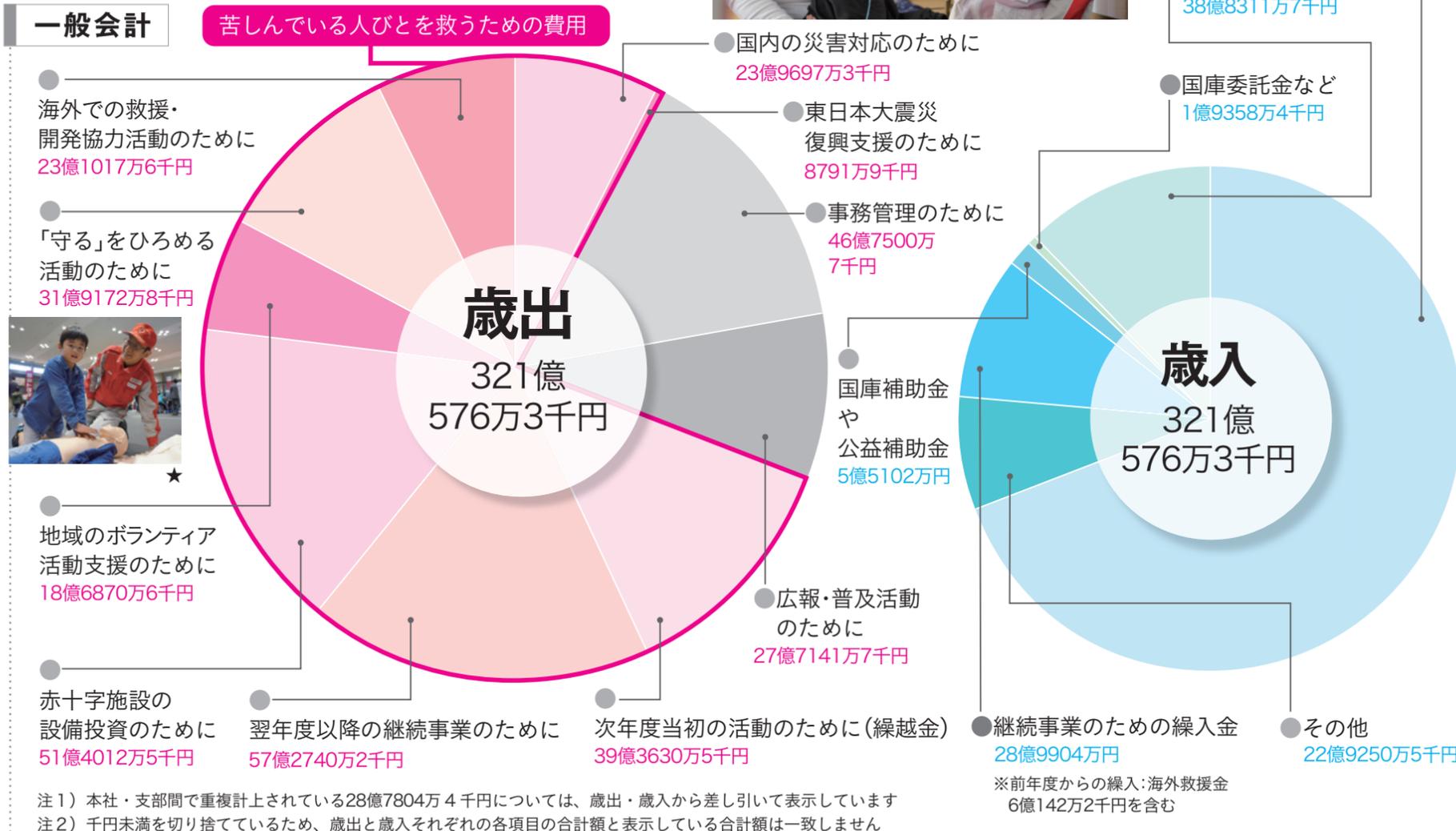
- 7月4日 大雨特別警報発令、球磨川など複数河川が氾濫
熊本県支部内に日赤災害ボランティアセンター設置(支部災害対策本部設置と同日付で設置)
ボランティアは自主参集し、無線交信・情報収集(7/4～8/13まで随時)のほか、避難所状況調査書の作成
- 7月5日 津奈木町社協へ救援物資搬送
- 7月6日 人吉市役所・津奈木町社協へ救援物資搬送(1)(※左ページ写真番号)
- 7月7日 芦北町役場へ救援物資搬送、人吉市スポーツパレス内日赤救護所へ資機材搬送
- 7月8日 福岡県支部からの救援物資を倉庫搬入・積み込み、県南5地域へ救援物資搬送
緊急セット電池交換(7/8～20)(2)
あさぎり町DVC運営支援(7/8～14)
- 7月9日 情報収集・レポート整理
人吉市にて被災事業所支援(泥かき・災害ごみ運搬)(7/9、11)(3)
- 7月10日 支援物資の感染防止パネル倉庫搬入・整備(7/10～12)
- 7月13日 支援物資の感染防止パネル積み込み、八代市DVCへ救護用資材準備・搬送
- 7月14日 地域奉仕団が支援物資(タオル約7500枚ほか)を支部に寄贈(7/14、16、21)
八代市DVC救護班支援準備、福岡県支部からの救援物資搬入
- 7月15日 八代市DVC救護班として救急奉仕団が活動(7/15～8/16)
支援物資のマスク・手拭き分け
- 7月16日 寄贈タオルの仕分け及びパッキング(7/16～30)(4)
- 7月17日 芦北方面で家屋の片付けなどの活動
- 7月19日 連絡調整、情報整理
八代市DVC運営支援(7/19～現在)
人吉市DVCにて情報収集、資材管理の支援(7/19.21～現在)(5)
- 7月22日 八代市DVC通信支援のため無線による現地調査
- 7月25日 八代市DVCでの救急奉仕団活動を青年奉仕団がサポート(7/25、8/8)
- 7月30日 支援物資の自動手指消毒器整備
- 8月1日 人吉市DVC運営支援(8/1から土日休日のみ)(4)
- 8月9日 八代市にて泥かき、家屋清掃などの被災地支援

活動継続中

赤十字NEWS オンライン
より詳しく、熊本ボランティアの声、復興に向けて頑張っている被災地の様子がオンラインで読めます
<http://www.jrc.or.jp/publication/news/>

令和元年度 日本赤十字社の決算概要を報告します。

令和元年度、日本赤十字社は一般会計と3つの特別会計(医療施設、血液事業、社会福祉施設)をあわせて総額1兆3000億円を超える予算規模の事業を展開しました。このうち、個人・法人の皆さまからいただいた会費や寄付金を主な財源として実施した活動(一般会計)にかかる歳出歳入は以下のとおりです。



全額が被災された方々に届けられます

災害義援金 141億1,953万1千円

【内訳】	令和元年台風第19号災害義援金	95億5万1千円
	令和元年台風第15号東京都義援金	7428万9千円
	令和元年台風第15号千葉県災害義援金	11億2513万6千円
	令和元年8月豪雨災害義援金	3億5886万8千円
	平成30年7月豪雨災害義援金	6億3841万9千円
	平成30年北海道胆振東部地震災害義援金	8億8533万9千円
	平成29年7月5日からの大雨災害義援金	8430万6千円
	平成28年熊本地震災害義援金	2億2922万8千円
	東日本大震災義援金	12億2389万1千円

※千円未満を切り捨てているため、合計は一致しません



★を除く写真すべて ©Atsushi Shibuya/JRCS

特別会計

医療施設

診療報酬を主な財源とする赤十字病院などの運営に伴う収入・支出です。

収入 1兆973億1089万9千円

支出 1兆1147億5191万8千円

差引額

← 174億4101万9千円

血液事業

医療機関への血液製剤の供給による収入を主な財源とする赤十字血液センターの運営に伴う収入・支出です。

収入 1654億1637万5千円

支出 1534億258万3千円

差引額

← 120億1379万2千円

社会福祉施設

措置費収入、介護保険事業収入などを主な財源とする各種社会福祉施設の運営に伴う歳入・歳出です。

歳入 187億9734万7千円

歳出 143億3186万4千円

差引額*

← 44億6548万3千円

注1) 千円未満を切り捨てているため、合計金額・差額は一致しません 注2) 収入とは「収益的収入」、支出とは「収益的支出」、差引額とは「収益的収入支出差引額」のことです(※の差引額を除く)
注3) 医療施設特別会計は、本社・施設間の内部取引額に相当する6億3431万7千円を収入・支出から差し引いて表示しています ●決算書の詳細は日赤ホームページをご確認ください

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。



寄付の協力者

弘中哲雄 (ひろなか・てつお)さん

山口県防府市/69歳/花農家

出荷停止の100本の百合で、献血者を笑顔に！

自宅の前のビニールハウスで、年間を通して百合の花を育てていますが、今回のコロナ禍で出荷がストップ。一番の出荷先である大阪からも納品しないでくれと言われて困り果て、りっぱに育った百合をせめて誰かに配りたい…と、配り先をいろいろ考えたら日赤さんが頭に浮かびました。日赤さんとのお付き合いはかれこれ50年になります。長年献血を続け、銀色・金色有功章をいただき、紺綬有功会会員にもなりました。地域の活動でも自治会で寄付を集めたり、私自身も会費を納めたりしています。百合のプレゼントは、山口県支部と相談して100本を献

血者へ配っていただきましたが、あつという間に配り終わったと聞いて、100本じゃ足りなかったかな？と(笑)。

日本中がコロナで大変なときですが、私たち農家は、大雨や台風にも不安を抱えています。九州の豪雨災害はひどかったですね。1カ月以上たちますが、まだ見通しが立たないでしょう。こういう自然災害の現場でも日赤が頑張ってくれているのを知っています。本当にありがたく、心強い存在です。これからも日赤さんとお付き合いを続けて、自分のできることでサポートをしていきたいと思います。

寄付するあなたも赤十字です

日本赤十字社へのご寄付の方法

クレジットカードで寄付



Webサイトからの登録により、クレジットカードでご寄付いただけます。ご寄付の方法は、毎年・毎月・今回のみからお選びいただけます。

身近な窓口から寄付



- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口

詳しくはこちら→



日本赤十字社 寄付

検索

donate.jrc.or.jp/lp/

3.11 あれから10年を生きて

第6回

東日本大震災の発生から2021年3月で10年。来年の3月号まで「3.11」から人生を変えた人々の物語を毎月連載します。

「津波に、のみ込まれる…！」

前方の十字路から灰色の津波が押し寄せ、私の運転する車に迫ってくるのが視界に入り、慌ててハンドルを切りました。地震によって信号がすべて消えている中、逃げようとする車でどの道も渋滞。それでもアクセルを踏み続け、ときに縁石に乗り上げ、車列に割り込みながらも、前へ、前へ！ 助手席には母が、そして後部座席にはチャイルドシートの中に生後6カ月の息子がいました。一瞬、車を止めて、チャイルドシートから息子を抱き上げ、走って逃げることも頭をよぎります。でも、あの津波に捕まったら助からない、車を止めてはダメだと本能が告げていました。どこをどう走ったか、とにかくハンドルを握り続け、気が付くと津波から逃げ切っていました。津波を見てUターンしてから、恐怖のためバックミラーを見ることができませんでした…同じように逃げた数台後ろの車は、津波に捕まってしまったのでは…。その後1カ月ほど、津波に追われる夢に毎晩うなされました。

私の自宅は勤め先である盛岡赤十字病院の近くにありましたが、その日は実家のある大船渡市に里帰り中でした。津波から逃げた後、母と息子とコミュニティセンターで一晩を明かし、翌日、十数キロの距離を歩いて実家に向かいました。その途中、津波が破壊した凄惨な光景が続き、「家に戻るのが怖い。家を見たくない」と泣きごとを言う母を励ましながら先を急ぎました。実家のある集落も、壊滅状態でした。ところが私の実家は高台にあったため、庭まで浸水したものの、家屋は無傷。実家で、父と夫と、奇跡的に再会することができました。夫はリュックにおむつとタオルを詰めて必死に私たちを探し回ったそうです。

電気・ガス・水道が止まっている実家での在宅避難生活が始まりまし

心を震わす、あの羽音に乗って

盛岡赤十字病院 看護師 熊谷周子さん

た。あの時の重く閉ざされた感覚を、どう表現したらいいか…。近所の家々は流され、行方不明の方も多く、道路が寸断されていたため支援もなかなか届きません。生き残った集落の人々は、家族や親しい人を失った悲しみだけでなく、見通しが立たない状況に不安を感じ、暗い気持ちで押しつぶされそうでした。私自身、産休中とはいえ看護師であり、何か役に立ちたいけれど、赤ん坊を抱えて何もできない、それが苦しかった。そんな時です。あの音が聞こえたのは。集落全体を震わす、力強い羽の音。「ヘリが来たぞ！」。人々はヘリの音に興奮し空を見上げました。DMATを乗せたヘリが、私たちの集落に来てくれたのです。

ヘリの音が、生きる力に変わる。自分たちには助けに来てくれる人たちがいる、外の世界とつながっている、という思いが、どれほど勇気を与えてくれたか。その経験から、産休が明けて病院に復職したあと、日赤の救護班の研修を受け、さらに全国各地に派遣される日本DMATの研修も受けました。私にはまだ被災地へ出動する機会が巡ってきませんが、次に大きな災害が起きたら真っ先に救護に向かいたい、そして被災された方々の気持ちに寄り添って、勇気と希望を与える活動をしたい、と「その日」のために備え続けています。



盛岡赤十字病院の救護訓練に参加する熊谷さん(左から2番目)



全国

コロナ禍の血液不足を何とかしたい！個人が自宅を献血会場に！感染対策にも配慮し、献血を盛り上げる取り組みが全国で展開

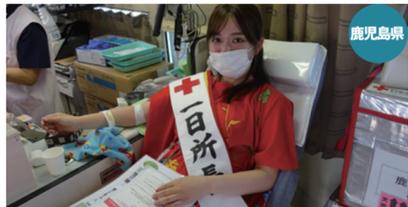
新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、全国の献血量が低下しています。そんな中、群馬県の個人宅が群馬県赤十字血液センターに献血バスの派遣を依頼し、注目を集めました。依頼者の清水久美さんは献血バスの派遣中止が相次いでいることを知り、自宅兼歯科医院の敷地に献血バスを要請。派遣の目安となる50人の献血協力者を集めるために清水さんは友人らに声をかけ、7月30日の当日は52人が献血に参加しました。

また、8月4日から6日にかけて、鹿児島県指宿市では毎年恒例の「アロハ献血」が開催されました。鹿児島県赤十字血液センターによると新型コロナウイルスや豪雨の影響で献血バスの稼働が減少。その現状を改善するべく、献血バスが市内23カ所を回って献血を呼びかけました。

※「アロハ」は指宿市の掲げる観光テーマ



清水さんの献血会場にはカフェスペースがあり三味線演奏も



一日血液センター所長の菜の花レイディも献血協力

全国

新型コロナウイルスがもたらす「差別」の怖さ、青少年も大人も声をそろえて「NO!差別」をアピール

新型コロナウイルス感染拡大は人々に不安をもたらす、過敏な気持ちが偏見や差別へとつながる危険性をはらんでいます。日赤では「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう!」というスライド教材を作成し、コロナ禍での差別についての啓発に取り組んでいます。



放送劇の練習を行う放送班のメンバー

青少年赤十字加盟校の千葉県立柏南高等学校では、コンピュータ部放送班による校内放送でこの教材をベースにした放送劇を実施。劇に出演した生徒は「不安や恐れが感情が差別や偏見につながるとは考えたこともなかった」と感想を語りました。



駅前メッセージウチわを配布

静岡県立三島南高等学校では、15人の青少年赤十字メンバーが「NO!差別〜本当に悪いのはだれ?〜」という啓発キャンペーンを展開。アイデアを出し合いオリジナルデザインのポスターとうちわを制作、校内や近隣の駅で配布しました。



北村さんの歌は7月に日赤京都府支部でお披露目

京都府青少年赤十字賛助奉仕団員で元小学校教諭の北村優さんは「偏見を防ぎ、皆で助け合うことを考えるきっかけになれば」と考え、同教材をもとに歌を制作。「不安や恐れをあおらない 差別やいじめはほらないぞ」と歌う動画を公開しました。



3密を避け、校内の大ホールで出張授業を実施

埼玉県川口市立西中学校では、日赤埼玉県支部職員による出張授業を開催。中学3年生約180人がウイルスによる不安と差別についての授業を受け、自分が何ができるのかを考えました。そして最後は医療従事者への感謝の言葉をまとめました。

福島県

視覚障害者に声で情報を！中学生が音訳ボランティア

福島県の青少年赤十字研究推進校・相馬市立向陽中学校では、生徒たちが音訳ボランティアについて学んでいます。音訳ボランティアは、視覚障害者のために活字の内容を音声にして伝えるのが役割。同校報道委員会が放送を担当する生徒17人が相馬市社会福祉協議会の指導を受け、本年度中に市の広報誌などを音訳した音声データの配布を目指しています。

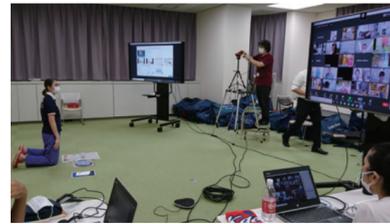


マイクセットを装着し、真剣に音訳に臨む生徒たち

東京都

コロナ禍でも救命手当てを！オンラインAED講習を開始

日赤東京都支部は、救急法短期講習のオンライン講習会を開始しました。コロナ禍の中、対面式の講習会に代わる形で実施しているもので、WEB会議システム「Zoom」を活用。胸骨圧迫のトレーニングでは空のペットボトルを人間の胸部に見立て、AED(自動体外式除細動器)の電極パッドの代わりにハガキ大の紙片を使うなど、会社や自宅で受講できる工夫を凝らしています。



ウイルス感染を予防しながら救命処置を行う方法を指導

神奈川県

「子どもの命を守る指導を」教員向けの防災研修を実施

日赤神奈川県支部では、7月27日に神奈川県立総合教育センターの防災教育研修において教員向け講義を実施しました。講義のテーマは「災害を経験した私たちに“今”できること」で、県内各地の小・中・高・特別支援学校から42人が参加。受講者からは「青少年赤十字防災教育プログラムは、楽しみながら授業に取り入れられる教材ですね」との声もありました。



受講者は過去の災害を振り返り、今後の備えについて議論した

全国

終戦から75年目の夏 戦争による犠牲と惨禍を次世代に引き継ぐために

戦後75年を迎え、各地で戦争犠牲者の慰霊行事が開催されました。8月5日、日赤秋田看護大学では従軍中に殉職した23人の看護婦の遺影と「赤十字救護員記念像」の清掃活動を実施。戦時下の救護活動に尽力した先人たちに思いをさせながら、日赤看護師同方会秋田県支部の会員らが遺影の立った額縁と記念像を磨き上げました。また、広島に原爆が投下された8月6日には、広島赤十字・原爆病院で「原爆殉職職員ならびに戦没職員慰霊式」が行われました。古川善也院長はいさつの中で、被爆患者の平均年齢が83.3歳にまで高齢化していること、世界中で核兵器廃絶と逆行する動きがあることを訴え、原爆病院として「今後也被爆の実情を伝え、平和の尊さを訴え続けたい」と強調しました。



左:戦時救護に尽力した救護員の功績をたたえる記念像、右:従軍看護婦の遺影



広島赤十字・原爆病院の幹部職員が慰霊碑に献花

「赤十字を応援！」プレゼント A

Ms.OOJA (ミス・オオジャ)さん 歌手

サイン入りCDアルバム

5名さまに



「Ms.OOJA の、いちばん泣けるドリカム。」 史上初！全曲 DREAMS COME TRUE の泣ける名曲のみで構成されたリベスト・カバーアルバム



集まった「エール」は、想像より遥かに大きな力になった

多くの人が、新型コロナウイルス感染症によって厳しい状況に立たされています。私自身もライブの延期や中止が続き、歌手として何が出来るかを考える日々です。なかなか終息しないコロナとの攻防の中、6月に「#最前線にエールを何度でも」に参加したのは私にとって特別な意味がありました。私はドリカムの曲に歌手になるきっかけを与えてもらいました。ドリカムの名曲の中でも「何度でも」は2017年のカバーアルバムにも収録した思い入れの強い曲です。その曲で、コロナと最前線で戦う医療従事者にエールを送る。実際に、たくさんの方がこのプロジェクトに賛同し、SNS上でエールを発信しました。集まって1つになったエールの力強さは格別です。私にとって「何度でも」は、さらに思い出深い曲になりました。

ミス・オオジャ©1982年、三重県出身(三重県観光大使、四日市観光大使を兼任)。2011年2月メジャーデビュー。1年足らずでシングル「Be...」が仲間由紀恵主演ドラマの主題歌に抜擢され、記録的なヒットとなった。圧倒的な歌唱力を武器に、多くの熱狂的ファンに支持されている。

「赤十字を応援！」プレゼント B

パートナー企業紹介 vol.6 株式会社ありあけ

「特別お楽しみ袋」の売上金を全額寄付へ。アイデアを生かす横浜の製菓企業



NPO法人「美しい港町横浜をつくる会」の会員企業として清掃活動に参加するなど、地域貢献に取り組む

横浜の地元企業として、地域を盛り上げるべく、お客様にお菓子を通じて感動や喜びを与える企業を目指している株式会社ありあけ。東日本大震災、熊本地震の際には、復興支援として売上金の一部を寄付するなど社会貢献も積極的に行っています。横浜土産として人気のお菓子、横浜ハーバーはありあけを代表する商品ですが、新型コロナウイルス感染症による今春の緊急事態宣言に伴い、店舗の臨時休業などで販売ができなくなり、在庫過多となってしまいました。ありあけではこれらの商品を詰め合わせて「特別お楽しみ袋」として販売。約3000セットを完売し、その全ての売上金590万7000円を日赤に寄付しました。また、5月20日～8月31日までの期間、「赤十字支援マーク」のシールが貼られた横浜ハーバー1個につき1円を寄付金とする販売で、医療活動などをはじめとする日赤への支援を続けました。

横濱ハーバーアソート ダブルマロン& ガトーショコラ 8個入り

5名さまに



船の形をかたどった横浜ハーバー ダブルマロンと黒船ハーバーガトーショコラのアソートセット。

※写真はイメージです。

上記プレゼントA希望者は、右記WEBサイトにてご応募ください。



インターネットアクセス

赤十字ニュース プレゼント 検索 www.jrc.or.jp/publication/news/

ここから応募できます



上記プレゼントB希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 9月号を手に入れた場所(例/献血ルーム) ⑥9月号に関するご意見・ご感想

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 9月号プレゼント係 FAX / 03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。9月30日(水)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます



WORLD NEWS

ショートショートフィルムフェスティバル&アジア 2020

日本

映画を通して人々の生きる力に寄り添う “気づき”が「人道」を考える最初の一步に

今年は「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア 2020」(SSFF)の特設プログラム、「戦争と生きるカプログラム supported by 赤十字」がオンラインで開催されます。その中からオススメの作品を赤十字国際委員会(ICRC)と日赤のスタッフが解説します。



赤十字国際委員会
(ICRC)
駐日代表部
広報統括官

まかべ ひとみ
眞壁 仁美



日本赤十字社
国際部企画係長
日赤国際人道研究
センター
研究員

さいとう あきひこ
齊藤 彰彦

齊藤：2015年にスタートしたSSFFと赤十字のコラボは今年で6回目。私も拝見しましたが、感情に訴えかける作品ばかりですね。

眞壁：戦争や争いがテーマなのでショッキングな描写もありますが、コメディもあり、作品を通して紛争や難民問題に関心を持ってもらえる機会になると考えています。

齊藤：インパクトある作品の一つが「HOPE」。私は大学で国際人道法^{*}の講義をする際この作



「HOPE (希望～彼女の命を救えなかった理由)」

戦闘に巻き込まれて致命傷を負った娘を病院に運ぶ父親。だが、紛争地の医療インフラは壊滅状態に追い込まれていた

品を使用することがありますが、「二度と見たくない」と漏らす学生もいますよ。

眞壁：私も一般向けの講演会で紹介するのですが、涙を流される方もいます。結末が辛すぎて耐えられないと感じる人がいるのは当然で、一方で「病院が機能しなくなったら命が救えない」ということが現実味を帯びて伝わる作品です。作品を通して何かしらの気づきがあれば、その先を考え、行動するきっかけになると思います。

齊藤：人形劇「ウタズズメ」も印象的な作品の一つ。人形劇のファンタジーさはありますが、冷凍車内の人々の描写は衝撃的です。

眞壁：“想像力”を喚起させる優れた作品だと思います。命懸けで冷凍車に乗り込まざるを得なかった移民、彼らを違法に運ぶ密航業者の存在



「ウタズズメ」

よりよい生活を求め冷凍トラックに乗り込む人々。その過程で悲惨な状況に巻き込まれていく様子を人形劇で描く



「ホーム」

8歳の少女サラは紛争で荒廃した街で、武器を拾い食料や衣服と交換しながら孤独に暮らす。ある日、交換した手りゅう弾が…

によって、移民がここまで追い詰められた事情や背景について考えさせられます。この「ウタズズメ」では移民の国籍・人種を限定しないように描いているのもポイントです。

齊藤：シリア問題を扱った「ホーム」。主人公の8歳の少女は2011年から始まったシリア危機の最中に生まれ、ずっと紛争と破壊が当たり前の世界で生きてきた設定ですね。

眞壁：描かれているのは紛争地での「生きる力」。拾った手りゅう弾を物々交換して生活の糧を得るしかない日々、それでも無邪気に見える子どもたちの様子など、シリアの現状が浮き彫りになりつつ、説明の無い描き方なのでラストシーンまで答えが分からない作品です。どう読み解くか、他の人と意見交換するのもいいですね。

齊藤：人間であれば誰も感じる痛みや苦しみ…まずそれに気づくことが「人道」の始まり。まっさらな状態で映画の世界観に身を浸すことでそういった気づきを得る機会になれば。

眞壁：日本では現代の戦争の実態があまり知られていなかったり、日常で戦争を語ること自体がまれですが、そのムードを変えていきたい。戦いの中に身を置く人たちの生活や力強く生きる姿に目を向け、自分たちの気づきをもとに大いに語り合ってもらいたい。そんな場を、このプログラムを通して提供できたらうれしいです。

^{*}負傷兵や捕虜、民間人、赤十字などを保護する戦時のルール

ショートショートフィルムフェスティバル & アジア2020

9月16日(水)～9月27日(日)

オンラインで開催

全プログラム視聴料無料

<https://www.shortshorts.org/2020/>



数字で見えた!

世界で生かされる皆さまのご支援

世界中の災害や紛争から、人々の命と健康を守る日赤の国際活動。皆さまの寄付がどのように世界で役立てられているのかを、数字でわかりやすくお伝えします。

南部アフリカ・エスワティニのHIV新規感染の減少率^{*}

-65%
(1万3000人⇒4500人)

^{*} 2010年以降



青少年ヘルスデーの参加者たち。性暴力や子どもの権利などさまざまなテーマを議論した

15歳以上のHIV感染率が世界で最も高いのが南部アフリカ地域にあるエスワティニ王国です。15歳以上の人口の3分の1が感染しており、特に青少年や若い女性の新規感染が課題になっています。

日赤は、エスワティニ赤十字社の行うHIV感染対策を2010年から支援しています。同社は診療所を運営しながら、食料・衛生用品の配布、学校での性教育、エイズ孤児や貧困家庭向けの児童保育の運営にも注力。また、ヘルスデーやサッカー大会などを活用し、一度に何百人もの若者を啓発することにも成功しました。若者の間での情報拡散という効果もあり、感染や不本意な妊娠の予防につながっています。その他にも、感染症についてのグループワークやHIV検査の実施など、さまざまなアプローチで包括的な支援を行い、新規感染者の減少に貢献しています。